

## 「霞ヶ浦導水事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 26 年 3 月 3 日（月）10:00～10:20

さいたま新都心合同庁舎検査棟 7F

発言者：意見発表者 2

三郷市から来ました●●と申します。利根川流域市民会の者です。今日はこの検証報告書（素案）についての意見を申し上げます。

この導水事業の目的は3つあります。1つが霞ヶ浦等の水質浄化、2つ目が新規利水の開発、3つ目が流水の正常な機能の維持ということで、利根川と那珂川の渇水時の補給であります。しかし、この3つの目的、いずれも虚構であります。この検証報告書（素案）では3つの目的とも現計画案が他の対策案に比べて優れているという判断がされておりますけれども、そもそもこの3つの目的、仮にこの事業が完成しても、達成することはできないものだということでもあります。この2つ目の目的、新規利水の開発とそれから流水の正常な機能の維持、これは霞ヶ浦を経由して水量に余裕のある河川から水量の少ない河川に、利根川と那珂川の間の水を行き来する。それによって都市用水を開発し、そして渇水時の補給を行うといった、そういったことになっております。しかし、この経由する霞ヶ浦の水質が極めて劣悪であるため、利根川、那珂川に比べて劣悪であるため、霞ヶ浦の水を利根川、那珂川に入れることはできないのであります。どれくらい水質が悪いかということです。有機汚濁の指標であるCODについて、霞ヶ浦と利根川と那珂川を比較しますと、霞ヶ浦のCODは平均では利根川の2倍もあります。それから那珂川に対しては4倍もあります。こんなに汚れた水を入れれば、当然、那珂川、利根川の水生物に大きなダメージを与えることは必至であります。この霞ヶ浦の水質には改善の兆しがないのです。これは霞ヶ浦のCODの経年変化、約40年間について見たものですけれども、低下の傾向が見られないということで、環境基準の数倍以上の値で高止まりしたままだということです。ですから、いずれはきれいになるから、霞ヶ浦の水を那珂川、利根川に入れることができるという話も成り立たないわけでありまして、この導水事業の2つの導水路のうち利根導水路、霞ヶ浦と利根川を結ぶ水路、これは20年前に完成しております。これは霞ヶ浦開発で開発した水利権を利根川に入れて、東京とか千葉に送るための水路も兼ねておりまして、これは利根川連絡水路というのですけれども、これは全く利用できない状況となっているということです。1994年の3月にできて、それで、1995年9月に試験通水したんです。霞ヶ浦の水を利根川に落とすわけなんです。そうしたら、シジミの大量死が起きまして、シジミ漁協に大きな影響を与えてしまったということで、その後、試験通水もできないまま、ずっときているということです。もっと詳しく調べてみようということで、情報公開請求を国交省と水機構にしました。その結果、利根導水路、別名は利根川連絡水路というわけですが、今まで使われたのは、僅か5日間だけです。約20年くらい経ってます。ほとんどがゼロ、要するに開かずの水路になっているということでもあります。要するに利根川と比べて、ひどく水質が悪い霞ヶ浦の水を利根川に入れることができないのであります。那珂導水路も同様でありまして、この導水事業の目的の2つ目、新規利水の開発とそれから流水の正常な機能の維持という目的は霞ヶ浦の水質が劣悪であるために事業が仮に完成しても達成することができないわけでありまして、ではもうひとつの目的、1番目の目的、霞ヶ浦等の水質浄化と、これも虚構なんですね。霞ヶ浦の汚濁の機構を踏まえれば、利根川と那珂川から水を入れてもきれいになるはずがないんです。霞ヶ浦については、何であんなに悪いのかと、これはよく知られているアオコです。マイクロシステリス。これで代表される浮遊性藻類が異常増殖して水質が悪化している

と。この原因というのは、周りから有機汚濁物質が入ってきているということではなくて、栄養塩類、窒素、リンが入ってきて、それを栄養源として、アオコ等の浮遊性藻類が異常増殖することになるという二次汚濁です。ですからこの窒素、リンの濃度を大幅に下げない限り、霞ヶ浦の水質は良くならないわけでありまして。そこでこの窒素とリンについて、霞ヶ浦と利根川と那珂川の水質を比較してみました。左の図が窒素です。窒素に関しては、むしろ利根川、那珂川の方が霞ヶ浦に比べてかなり濃度が高いですね。こういう水を入れれば霞ヶ浦の窒素濃度は逆に上がります。それからリンはどうかというと、リンに関しても利根川はやはり、霞ヶ浦の水質よりもかなり高い。那珂川は低いですが、両方の川から入れるとなりますと、リンの濃度はあまり変わらないということになりますね。ということで、先ほど申し上げたとおり、窒素、リンを大幅に下げない限りこの霞ヶ浦の水質は良くならないのですけれども、むしろ、入れることによって窒素濃度は上がり、リン濃度は変わらないわけですから、この導水によって霞ヶ浦の汚濁状況が改善されるはずがないわけでありまして。やはりこの窒素について経年変化を見てみますと、これも改善の兆しがありません。やはり環境基準の数倍以上のところまで高止まりしているわけです。次は、霞ヶ浦のリン濃度。これも、環境基準の数倍以上のところまで高止まりしてしまっているということです。ですから、こういう状況の霞ヶ浦に利根川と那珂川から導水しても、霞ヶ浦の水質が改善されるはずがないわけでありまして。ということで、この霞ヶ浦の水質改善に寄与するというのは、あくまで机上の計算による虚構に過ぎないということです。むしろ導水に伴って、霞ヶ浦の底泥が巻き上げられて、水質が悪化することが予想されるわけでありまして。なお、この霞ヶ浦の水質を良くするためにはどうすればいいか。これはもう、今まで言われていますように、出口である常陸川水門、これを極力解放して、完全水ガメ化をやめることでありますけれども、国交省はそういう判断を全くしようとはしておりません。もうひとつ、あと付け加えたいことは、この首都圏の水道用水、工業用水は減少の一途を辿っておりまして、新しい水源開発は全く不要な、そういう時代になってきているということです。霞ヶ浦導水事業によって、茨城県、東京都、千葉県、埼玉県の水道水を毎秒7.052m<sup>3</sup>、そして工業用水を千葉県と茨城県の工業用水を毎秒1.974m<sup>3</sup>開発することになっております。しかし、新しい水源開発は、今はもう不要な、そういう時代になっているというのが、首都圏の水道用水、工業用水は減少の一途を辿っている。そういう時代になってきているということです。この図は首都圏6都県の上水道の1日最大給水量の動向を見たものです。青いのがその実績を示しております。1992年度から2011年の間に、19年間です、約200万m<sup>3</sup>減っています、1日です。これは霞ヶ浦導水事業の開発予定水量、1日78万m<sup>3</sup>の2.5倍にもなる水量です。こんな多くの水量が減ってきているということです。なぜ減ってきたかというのは、これは1人当たりの給水量の動向を見たものですけれども、1人当たりの水量がどんどん減ってきたということです。減ってきた要因はいくつかありますけれども、大きな要因は節水型機器の普及であります。今後も節水型機器の普及は進んでいきます。ということで、この1人当たりの水量減少傾向は、今後しばらくの間、続くことは間違いありません。一方、この人口はどうかというと、首都圏全体としては人口は今なお若干増えております。ただし、東京、埼玉以外の県はすでに減少傾向です。全体では少し増えているわけですが、この人口も2015年度以降は減少傾向に向かいます。首都圏全体としてのですね。その後は、減少速度が速まって、どんどん首都圏の人口も減っていく、そういう時代になっている、なりつつあるということです。ということで、この実績として、首都圏の利用する1日最大給水量ですけれども、減少傾向になっていることは先ほど申し上げました。今後は、1人当たりの給水量が今後更に減っていくと。一方で人口も減少傾向に向かうとなりますと、この減少傾向は今後も続いていくということで、首都圏の水道の需要はますます縮小していく、そういうふうになっていくということでありまして。もうひとつの工業用水はどう

かという、これも首都圏全体、6都県全体の工業用水の動向を見たものですが、このように減ってきております。ということで水道用水、だけではなくて、工業用水、これはもっと前から出ているんですけども、減ってきているということで、都市用水はいずれもこれから縮小していくという、そういうふうに変ってきているということです。ということで、そういうことを踏まえたと、霞ヶ浦導水事業によって、新たな水源を開発する必要性はもう、皆無になっていると。意味のないものになってきているということです。そういう時代において、霞ヶ浦導水は、何の意味があるのだということです。真剣に考えなければならぬと思います。最後のまとめになりますけれども、先ほど申し上げたとおり、霞ヶ浦導水の3つの目的、霞ヶ浦の水質浄化、新規利水の開発、それから流水の正常な機能の維持、渇水時の補給です。いずれも虚構のもとにこの目的が造られたものであるということです。実際に事業が仮にこのまま進められて、完成したとしても、これらの目的を達成することはできない、そういう誠におかしな事業だということです。さらに先ほど申し上げたように、首都圏の都市用水、水道用水、工業用水、いずれも縮小の一途を辿る、そういう時代でありますから、新しい水源を開発する必要性は全く意味がなくなるものになっているということです。こういう時代においては霞ヶ浦導水は進める必要は全くありません。霞ヶ浦導水事業全体として1,900億円、大変お金を使ってきていると。更にこれから事業を遂行すれば、事業費の増額もあるかもしれない。大変な公費の浪費を伴うものであるということです。それから、霞ヶ浦導水、もしこれが行われれば、那珂川と利根川の自然に大きな影響を与えます。実際に、この那珂川の方では、霞ヶ浦導水事業がもし行われれば、那珂川のアユに大きな影響を与えるということで、この事業の差し止めを求める、今、裁判が展開されております。このようにこの巨額の金を使って、そして目的は虚構であると、時代として全く意味がないものであると。そして自然に大きな影響を与える霞ヶ浦導水事業は中止という判断がされなければならないと思います。以上で私の陳述を終わります。